



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.102  
2012.3.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と土器の実測・整理・分析を強みにバックアップする企業です。

## 縄文の使用痕

—石器と先史時代の生活がもっと明らかになるために—

### 第23回(最終回)

## 石器組成論

これまで22回にわたり縄文時代の使用痕をみてきました。先史社会における生産活動の実体は、石器組成を明らかにし、個々の使用痕分析のデータを積み重ねることで、より具体性が見えてきます。ただ石器組成論は土器の相伴関係と、器種分類の方法が問題になります。

縄文時代研究は、土器が編年・地域性の基準になり研究されています。時期の明確な土器と相伴していれば、副葬品のように意図的なまとまりをもとに石器組成を組み立てていくことで、使用痕分析が生きてきます。

次に問題になるのが、器種分類です。円筒下層式文化は石匙、前期大木式文化は搔器・石筥、諸磯・勝坂式文化は

打製石斧が多いなど、土器文化ごとに石器組成の差が認められます。それは生業・文化の差として捉えられていますが、前提に器種分類があります。

山中一郎氏は、技術形態学と機能形態学により石器組成論と器種分類について、用途と製作の観点から整理しました。石器組成論の解釈として、(A)機能差(B)文化進化(C)異なる環境への適応(D)異なる伝統を持つ集団、の4つをあげています。縄文時代研究は(D)を縄文土器が論じているため、石器組成論は(A)(B)(C)を主体的に取り扱っています。90年代ごろから石器の製作技術など、技術形態学の視点から石器分類が行われています。しかし技術形態学的に石器を分類すれば、立場は(D)となり、分類が(A)に直接結びつきません。

石器組成論は用途を基準にした機能形態学によって成り立っているので、2つの形態学は前提が違うことを認識して用いなければなりません。

さらに使用痕は必ずしも確認できないことも問題です。写真1は三内丸山遺跡出土の石槍です。器体がねじれ、整形加工は写真2にみられるようなバルブの発達が顕著でなく、規格が整った剥離面で、石器を薄く整形しています。使用痕観察前は、携帯用ナイフと推定しましたが、それほど顕著な使用痕は確認されず(写真3)、石槍かナイフかは判断がつかません。

使用痕分析は不確定要素が多いので、石器研究は機能形態学ではなく、技術形態学に基づいて分類する必要があると思います。しかし上述の通り技術形態学は、石器組成論に直接結びつかない弱点があります。技術・機能形態学を組み合わせることで、今後の課題と言えます。

石器使用痕分析は、肉眼で得られない情報が埋もれていることは確かです。石器研究の学史・方法論・問題点を整理した上で使用痕分析を活用していけば、先史社会の解明に大きく貢献できると思います。

長い間ありがとうございました。

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

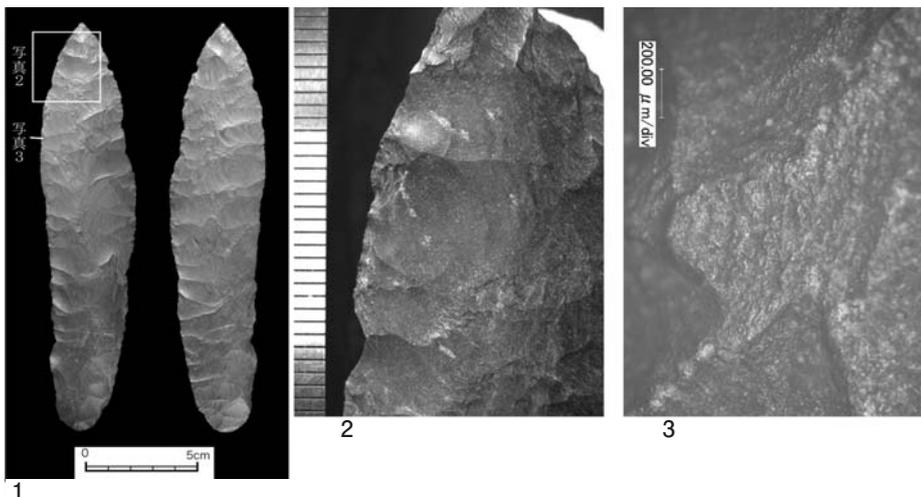


写真1: 三内丸山遺跡第6鉄塔地区・Ⅴa層出土(円筒下層a式期); 『三内丸山遺跡Ⅹ』1998青森県埋蔵文化財調査報告書 第252集掲載資料を、筆者が撮影し、青森県教育庁文化財保護課より転載許可をいただいた。

### 目次

■縄文の使用痕	石器組成論	高橋 哲 …1	■リレーエッセイ	マイ・フェイバレット・サイト(第95回)	中村 豊 …3
■考古学の履歴書	良き師・良き友に恵まれて(第2回)	渡辺 誠 …2	■考古学者の書棚	『石窟寺院の研究』	大竹憲治 …4

## 考古学の履歴書

## 良き師・良き友に恵まれて(第2回)

渡辺 誠

## 2. 慶応大学への進学

1年間のアルバイト生活も終わり、1958年に慶応義塾大学へ入学することができた。喜んで入学の手続きのために上京したが、入学式はまだというこの時期に、旧大宮市膝子遺跡の発掘に参加させてもらえることになり嬉しかった。急いで着替えを送ってもらい、縄文晩期の丸木舟の発掘のお手伝いをするようになったが、何もかもが本で読んでいただけで不安も多かった。

藤田亮索先生の下で大学院学生の近藤 正氏がおり、地元からは安岡路洋・柳田 敏司氏が参加された。そして特に安岡先生は半人前大学生の私に、現場のことをよく手ほどきして下さった。先生は後にテレビの「何でも鑑定団」で人気を高められたが、その忙しい時にもいろいろ教えて下さった。この時は、現在埼玉県立博物館になっている所にあった大宮文化会館に泊まった。夕食後、近藤氏より少し先輩の可児弘明氏のオールの実測を手伝ったが、藤田先生が夜遅くまで終わるのを待たせておられて緊張した。

そして入学式があり、やっと本当の大学生になれた。下宿のことやアルバイトのことなど、江坂輝弥先生には大変お世話になった。以後永く先生の庇護のもとに、勉強を続けることになった。下宿は当時先生がおられた小田急線千歳船橋駅付近であり、奥様にも大変お世話になり、ありがたいことであった。先生は当時東洋史の助手であった関係で、2年になって東洋史専攻生となったが、1年の教養課程で授業に通うのは、三田ではなく日吉であった。

先生の主たる研究室も三田ではなく、目黒の白金台にあった藤山記念工業図書館跡であった。図書館はすでに小金井の工学部へ移転しており、その後を利用していたので広がった。日吉の授業の後は、いつもここへ通ったのである。ここには近藤・可児氏より上級生である笹津備洋氏(後に海洋氏に改名)がいつもいた。

藤山にはいろいろな縄文の遺物があり、特に釣針や銚の骨角器が多くて面白く、貝や魚骨についても教えて頂いた。帰りは大抵ご一緒し、時折渋谷の喫茶店にはいった。井の頭線の駅近くの「ボン」で、先生はここでいろいろな先生方とお会いになった。お陰で本でのみお名前を知っていただけの有名な先生のそばに便乗して座らせて頂き、大学生になった幸せを味わった。「ボン」のマスターの松谷貞義氏は慶応のOBで、個人的にも大変可愛がって頂いた。そして後に埴輪などのコレクションは、夫人より名古屋大学考古学研究室に御寄贈を受けた。

またこの年、青森県八戸市長七谷地貝塚・類家貝塚・根城古墳群の発掘にお供した。これらの江坂先生の発掘には、いつも女房役として笹津氏がおり、新米の私を厳しくかつ温かく指導して下さいました。後に郷里の沼津へ帰られたが、東名高速道路の事前発掘が行われると、しばしば呼んで下さった。類家貝塚ではカツオとともに多量のサケ類の骨が出て、決して

に残らないのではないことが分かり、後に軟骨だから残らないだけとするサケ・マス論者に大きな疑問をもつことになった。これらの発掘時に音喜多富寿・栗村知弘・市川金丸先生に面識を得た。当時八戸高校の学生であった春日信興氏とも知り合った。彼は考古ボーイで、近在の遺跡や遺物所蔵者をよく知っており、しばしば案内してもらったが、特に五戸町で丹塗りの独鈷状石器を見せられた時には感激した。この八戸の方々との御縁は今でも続いており、いろいろ教えて頂いている。

また、2年生になった春休みには、三田の新築された西校舎の4階に引っ越すことになり、二人でトラックの上乗りをしてピストン輸送を行った。

行動半径の狭かった時代に遠く青森まで連れて行ってもらう嬉しかったが、2年になった1959年の春休みには、さらに佐賀県竜王遺跡の発掘にも連れて行ってもらった。生まれて初めての九州でありとても嬉しかった。この時に佐賀県の松岡 史氏や、当時九州大学の助手であった渡辺正気先生とも知り合うことができた。また同級生になった音喜多先生の三男である進氏も一緒だった。かれは帰京直前に孟宗竹のタケノコをバックに詰めていたが、先生へのお土産とのこと、東北は孟宗竹の北限の外側に位置していることを実感させられたが、今日竹細工や編物の研究をする時によく思い出すことである。

九州へは同年秋に熊本県宇土市曾畑貝塚や、65年には同市轟貝塚の発掘にも参加させて頂いたが、これら3貝塚はいずれも大陸との関係がある曾畑系文化の遺跡であり、当時の先生の重要な関心事であった。そして国交回復以前の韓国から、金元龍先生も轟貝塚にみえられた。香港・台北・那覇・鹿児島という、今からみるととんでもないコースであったが、両先生の深い友情が示されている。金元龍先生もこのことを大事に考えておられ、国交回復後江坂先生のたびたびの訪韓へと発展していった。また鹿児島からは河口貞徳先生の運転する車でこられた。この時の先生方はすごいメンバーで、賀川光夫・乙益重隆・池永寛治・小片岳彦先生等々である。

そしてこれら熊本県下の発掘には、同世代の大学生が大勢いて、彼らとの交流は今でも続いている。佐賀県の森淳一郎、熊本県の富田紘一・島津義昭・松本健郎氏などの面々である。江坂先生の偉さの一つに、その地域から東京の大学に来て考古学を勉強している学生は必ずメンバーに加えることにしていたことである。もちろん私も見習ってきた。

しかし厳しい一面もあった。今何に関心があるかと聞

## 略歴

昭和13年11月18日	福島県平市大町(現いわき市)に生まれる
昭和32年3月	福島県立磐城高校卒業
昭和33年4月	慶応義塾大学文学部入学
昭和43年3月	同上大学院博士課程修了
昭和43年4月	古代学協会平安博物館勤務
昭和54年8月	名古屋大学文学部助教授
平成元年4月	同上教授
平成14年3月	同上定年退職、同上名誉教授
平成15年4月	山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長(18年3月まで)
平成18年7月	日本考古学協会副会長(平成22年5月まで)

かれ、高校時代から興味があった独鈷状石器とお答えしたところ、それはまだ本当の用途が分かっていないのだからやってみなさい、さしあたり先人の意見をよく調べるようにと、図書館の考古学関係の本すべてに亘って調べるように言われた。さらに厳しかったのは角田文衛先生であった。いくら実測して資料を積み重ねても用途が分からなければ意味がない、自分が一番数を知っていると自慢しているだけだと言

われた。以来約40年、人に資料を提供しても何も書かないできたが、近年ようやく書いてもいい段階に差し掛かってきた。

また独鈷状石器のカードを作ろうとした時、所蔵者の欄は2行にするようにと指示された。いわゆる珍品は、しばしば持ち主が変わることがあるからということであった。さすが多くの資料を見てきた先生ならではの御意見であった。

隔月連載です。次回は石井則孝先生です。

## U レーエッセイ

### マイ・フェイバレット・サイト 95

#### 庄・蔵本遺跡 ～ 徳島県徳島市

中村 豊

徳島市庄・蔵本遺跡は、吉野川下流南岸最大の支流である鮎喰川の形成する沖積平野の東岸、眉山の北西麓に位置する。この眉山北西麓には縄文後期から近世にいたるまでの、多くの遺跡群が展開している。こんにちの地名によって、三谷遺跡、庄・蔵本遺跡、南庄遺跡、鮎喰遺跡、名東遺跡に区分されている。

この一帯で集落の形成が本格化するのには縄文後期後葉である。庄・蔵本遺跡西端の財務省蔵本住宅地点では、後期後葉の住居跡一棟が検出されている。晩期前半の土器は、同じく西端の旧あさひ学園地点の包含層で確認されている。晩期後半の凸帯文土器期は、名東遺跡で土器、石器が豊富に出土した。三谷遺跡では凸帯文土器と遠賀川式土器が共伴して出土し、多数の石器、貝塚や動植物遺体が検出され、七体にもおよぶイヌの埋葬が確認された。

三谷遺跡と相前後するころ、庄・蔵本遺跡において弥生前期の集落が形成され始める。前期初頭の遺跡は、比較的小規模なものが庄・蔵本遺跡や鮎喰遺跡の微高地上で点々とみつかっている。三谷遺跡のように凸帯文土器を主体とする小集団と遠賀川式土器を主体とする小集団が混在し、縄文から弥生への移行期を形成していたものと考えられる。続く弥生前期中葉、庄・蔵本遺跡は、徳島大学蔵本キャンパスを中心に巨大化しはじめる。灌漑用水路を開削し、水田を営んでいる。複数棟の住居跡も検出されている。本格的な弥生集落がようやく形成されたことを示すものである。

続く前期末から中期初頭にかけて、庄・蔵本遺跡周辺の遺構群は厚い洪水砂によって埋没してしまう。この埋没過程においても豊富な遺構、遺物が検出されているが、やがて、用水路網が荒廃し、集落が解体してしまう。これ以降、一五世紀ごろまで、新たな地層の堆積は認められない。地形の安定化が、水田経営の難航をまねいたものと推察される。弥生中期前葉から中葉の集落は、あたかも縄文期に帰ったかのようで、点在するにすぎない。

弥生中期末から後期初頭にかけて、遺構は再び増加し始める。南庄遺跡では23棟の竪穴住居跡が密集して検出され、多数の石器未成品が出土している。名東遺跡で扁平鈕式銅鐸が埋納されたのも、おおむねこの時期と考えられる。庄・蔵本、南庄、名東の三遺跡あわせて、50基前後の方形周溝墓が築かれるのもこの時期である。

後期前葉に、ふたたび遺構密度はうすくなるが、後期後葉から終末期に、また多数の遺構がみられるようになる。このころから鉄器が徐々に増加し、終末期には本格的な鍛冶遺構が検出されている。弥生終末期の集落は、弥生前期には水田や用水路が存在していたところに立地している

庄・蔵本遺跡でもっとも特筆すべきは、弥生前期の水田と畑がセットとなって出土したところにある。とくに畑と雑穀種子の検出は、水田中心の弥生時代農業観に一石を投じるものであった。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは遠部 慎さんです。



弥生前期の畑跡



弥生前期の水田

## 考古学者の書棚

## 「石窟寺院の研究」

齋藤 忠／第一書房(1999)

大竹 憲治

日本考古学界の最長老で今年8月28日には、満104歳を迎えられる齋藤忠先生(大正大学名誉教授・文学博士)の著書で第一書房が平成11年(1999)10月に出版した『石窟寺院の研究—インド・中国・韓国・日本の系譜を求めて—』を取り上げる。その理由は、本書が私を中国仏蹟研究に誘ってくれたからである。本書は、B5版で本文531頁の大部であり、章立ては下記の通りである。

## ◎序編 石窟寺の名称・分布・形態

第1章石窟・石窟寺の名称、第2章寺院形態から見た石窟寺、第3章環境と分布、第4章形態・構造と機能

## ◎前編 石窟研究の学史的展開

第1章インド石窟寺の日本の調査と研究、第2章アフガニスタン・パキスタン・バーミヤン石窟の日本の研究、第3章中国石窟寺の諸外国の探検・調査と研究、第4章日本における研究の展開(1)、第5章日本における研究の展開(2)、第6章中国における調査研究の展開(1)、第7章中国における調査研究の展開(2)、第8章韓国石窟庵董等に対する研究、第9章日本白杵窟龕等に対する研究

## ◎後編 各国の石窟寺の概観

第1章インドの石窟寺、第2章アフガニスタンの石窟寺、第3章中国(1)新疆地区、第4章中国(2)敦煌地区、第5章中国(3)河西・隴東及びその周辺地区、第6章中国(4)古代都京周辺地区、第7章韓国の石窟庵その他、第8章日本の白杵窟仏その他

## ◎付編 アジアの石窟寺について

第1章中国の石窟寺とインドとの関係、第2章韓国における中国石窟寺の影響とその転換、第3章日本の窟龕の発達と韓国・中国との関係

かかる大著の論述のうち、序編では石窟が本来、石窟寺院であることを説き、その形態と占地を論じている。前編ではアジャンター石窟をはじめとするインドの仏蹟調査の研究史を回顧した。また、齋藤先生自ら2度の現地踏査(1947年・1977年)をしたアフガニスタン・バーミヤン石窟の観察は、その後、タリバン勢力に破壊されたため、以前の様子を知る上で重要である。後編には、著者齋藤博士が実際に踏査したインド・アフガニスタン・中国・韓国・日本の石窟寺・仏龕・磨崖仏を地域別に概観している。この中で第3章から第6章の中国の石窟寺(本文225頁～353頁)についての記述が特に印象に残っている。これら中国の主要石窟寺のうち、キジル石窟寺・クムトラ石窟寺・クズルガハ石窟寺・ベゼクリク石窟寺・敦煌莫高窟・西千仏洞石窟寺・榆林窟・馬蹄寺石窟・炳靈寺石窟・慶陽北石窟寺・慶陽南石窟寺・

雲崗石窟・王母宮石窟・龍門石窟・鞏県石窟寺・天龍山石窟寺の現地踏査には、筆者も同行し、石窟寺について直接指導を受けている。したがって、さまざまな現地調査でのエピソードを共有しているが、次にその一端を紹介しておく。

平成6年(1994)8月、王母宮石窟を見学後、慶陽南石窟寺を見学した際、齋藤先生が本石窟の管理人が飼っていた大きな番犬に咬まれたことがあった。同行していた大塚初重先生(明治大学名誉教授)や鈴木源氏(現焼津市歴史民俗資料館)たちと狂犬病を心配したことを思い出す。幸い大事には至らなかったが、つい20年ほど前までの中国の旅事情が困難であったことを物語るエピソードである。また、これに先立つ平成4年(1992)8月には、河南省の北響堂山石窟寺を訪ねているが、当時満80歳を越えていた齋藤先生が急崖の本石窟寺を大学生だった鯨岡勝成(後に多摩美術大学講師・故人)・田村雅樹(現茨城県教育財団)の両氏と一緒に登ったことなどが甦ってくる。他にも、平成10年(1998)8月のキジル石窟寺では、「とうとう来てしまいました」とうれしそうにつぶやく齋藤先生の姿に、同行した野坂知広氏(現新宿区文化観光国際課)たちと思わず感動させられたことなどもよく憶えている。

このように中国の石窟寺の踏査や見学は、何度か足を運ばないと瞥見できないことも多々あり、『石窟寺院の研究』の上梓後も、私は本書を携えて中国石窟寺へ出かけている。齋藤先生と同行できなかった重慶特別市大足県にある宝頂山石刻・北山石刻がそうであり、四川省安岳県の臥仏院石刻・茗山寺石刻・千仏塞石刻なども同様である。これらを見学することにより、筆者は中原地帯で成立した釈迦・普賢・文殊を中心とする華嚴三聖(釈迦三尊)信仰が四川地方にまで及んだことを把握できた次第である。さらに、かかる華嚴三聖信仰が雲南省劍川県石鐘山石窟第4号仏龕にまで及んでいることも、現地踏査をしたからこそ証左できたのである。

以上のように『石窟寺院の研究』は、中国石窟寺研究のバイブルであり、無論、我が国や韓国の磨崖仏を吟味する上でも重要である。筆者は、中国での石窟寺院の踏査を通じて、齋藤先生から25年以上に亘り直接指導を得る機会に恵まれたため、福島県双葉町に所在する鴻草磨崖仏の研究を成就することができたものと思っている。

## アルカ通信 No.102

発行日 2012年3月1日  
 発行人 角張淳一  
 発行所 考古学研究所(株)アルカ  
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15  
 TEL 0267-25-0299  
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp